

完新世後半の温帯性針葉樹花粉の産状について  
 ー大阪平野とその周辺地域の遺跡調査成果を基にー  
 バリノ・サーヴェイ(株) \*辻本裕也

近畿地方の太平洋側地域の花粉分析結果では、照葉樹林要素であるアカガシ亜属が 5000～4000 年前頃に優勢となり、約 3000～2500 年前頃になるとスギ属とともにモミ属・ツガ属・コウヤマキ属などの温帯性針葉樹が増加することから、標高 700m 以下の照葉樹林域において温帯性針葉樹類がかなり生育していたことが推定されている(高原,1998)。このような傾向は、大阪平野とその周辺地域に位置する遺跡の花粉分析結果でも確認される。これら遺跡の結果をみると、温帯性針葉樹の増加パターンや増加する種類構成が地域や水系によって異なっていることが確認される。以下に生駒山西麓の事例(図1)を示す。

生駒山西麓の扇状地から低地にかけて位置する遺跡のうち、音川・鬼虎川水系に位置する北島遺跡・鬼虎川遺跡では、縄文時代晩期～弥生時代前期以降にスギ属が増加し、弥生時代後期～古墳時代層準で顕著に増加する。一方、讃良川水系に位置する讃良郡条里遺跡では温帯性針葉樹の増加時期が早く、約 4000 年前以降にスギ属とイチイ科・イヌガヤ科・ヒノキ科が増加する。また、北島遺跡・鬼虎川遺跡で確認された縄文時代晩期～弥生時代前期以降の顕著なスギ属の増加傾向は確認されない。なお、縄文時代中期～晩期層準でコウヤマキ属の多産層準があるが、化石の保存状態が悪いため偏った組成になっている可能性がある。

このように音川・鬼虎川水系と讃良川水系では温帯針葉樹の増加パターンや増加する種類構成が異なっている。その原因として次のようなことが推定される。北島遺跡・鬼虎川遺跡において温帯性針葉樹が増加する層準は、干潟潮上帯の堆積環境から浅い湖沼・湿地の堆積環境に変化する層準に相当する。これに対して、讃良郡条里遺跡は4000年前以降、弥生時代前期にかけて土壌発達する時期を挟む在る氾濫原の堆積環境が継続している。このような堆積環境に起因する化石群集の形成過程(タフオミー)の違いが温帯性針葉樹の産状の地点間差異と関係している可能性がある。しかしながら、北島遺跡・鬼虎川遺跡において、陸域からの土砂流入が認められるようになる弥生時代以降の層準でも温帯性針葉樹の産状は讃良郡条里遺跡のそれと異なっている。このことは、温帯性針葉樹の産状の差異がタフオミーの違いだけでなく、集水域の植生の違いにも起因していることを示している。温帯針葉樹は斜面崩壊地や地滑りなどにより鉍質土壌が露出する攪乱地において更新が行われることから、各遺跡の背後の扇状地などの地形変化と温帯性針葉樹の増加が関係している可能性がある。讃良郡条里遺跡において温帯性針葉樹が増加開始する時期は、扇状地に開析流路が形成され土砂流出が顕著になる時期に相当することから、集水域での植生攪乱が温帯針葉樹の分布拡大と関連していることが窺える。この点については、今後各水系における地形発達過程に基づく、複合的検討を行う予定である。

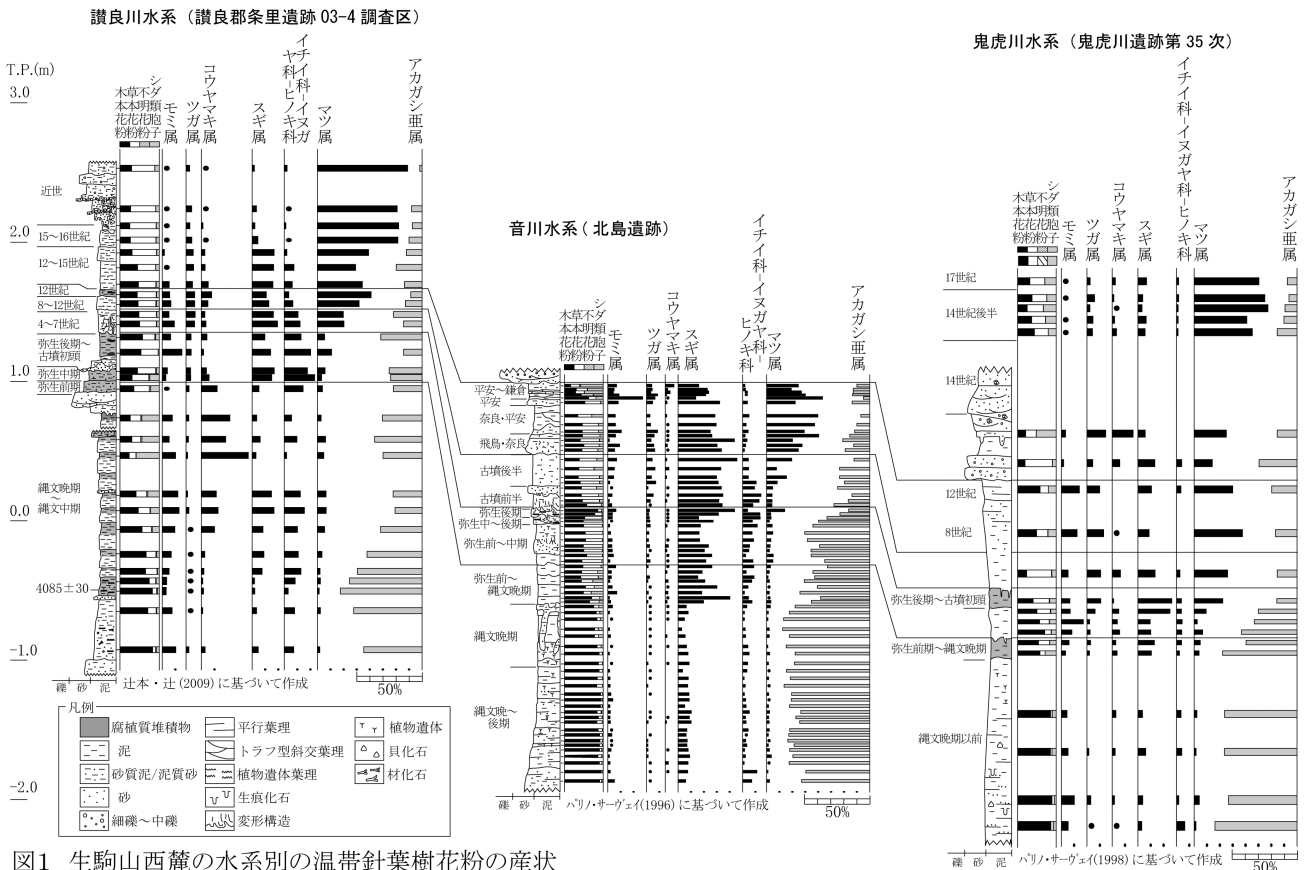


図1 生駒山西麓の水系別の温帯針葉樹花粉の産状

引用文献 : 高原 光,1996,近畿地方の植生史.図説 日本列島植生史,安田喜憲・三好教夫編,朝倉書店,114-137.